

2021年11月14日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 大谷京子

奏楽 小出由里子

前 奏

招 詞

フィリピの信徒への手紙 第2章10節-11節

讃美歌

讃美歌 21-351-2 (聖なる 聖なる)

交 読

詩編 第23篇 (p. 25)

祈 禱

聖 書

マルコによる福音書 第1章16~20節

(新約 p. 61)

讃美歌

讃美歌 21-194-1 (神さまはそのひとり子を)

説 教

「恵みのもとで生きる」

「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、・・・」。ここでわたしたちはイエスさまのお姿を、いろいろと思い浮かべます。まだ朝早いのかもしれません。そして、

たまたまそこで網を打っているふたりの男性をご覧になって、ふと思いついたように「わたしについて来なさい」と言われた。そんなふうに想像するかもしれませんが、けれど、おそらくそんなふうに想像すると、聖書の言葉を読み間違えることになるだろうと思います。

たとえば「ご覧になった」。ふと見かけたというのではなくて、じっと見つめる、鋭く見つめるという意味です。このイエスさまのまなざしは、この後イエスさまの歩みを語っていく福音書のなかで、しばしば語られる大切なものです。イエスさまが、シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネに深いまなざしを注がれた。深く彼らの存在の中まで見通しながら、これを捕らえる言葉を語られました。

「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」。
あなたがたは、今まで魚を取る漁師だった。けれど、これからは、人間を取る漁師になる。「人間をとる漁師」、こういう言葉

をわたしたちはあまり歓迎しないかもしれません。まるで人をかどわかす何かのようです。けれどここで、イエスさまの「人間をとる漁師」という言葉を聞く時に、多くの人たちが思い起したのは、旧約聖書に出てくる同じ表現です。幾つも出てきますが、ひとつだけ紹介します。預言者エレミヤの言葉、エレミヤ書第 16 章 16 節、17 節です。

見よ、わたしは多くの漁師を遣わして、彼らを釣り上げさせる、と主は言われる。その後、わたしは多くの狩人を遣わして、すべての山、岩の裂け目から、彼らを釣り出させる。わたしの目は、彼らのすべての道に注がれている。彼らはわたしの前から身を隠すこともできず、その悪をわたしの目から隠すこともできない。

ここに出てくる漁師は神の目をもった漁師です。この神の目は、わたしたちの罪も悪もはっきりと見抜く、そういう目です。漁をする人は実際、鍛え上げられた目で、素人であれば

何も見えないようなところに獲物が潜んでいるのを見つけます。それを追い出し、目の前に明らかにする。旧約聖書に登場する、神さまから遣わされる漁師たちは、わたしたちの悪を明らかにして、そこからわたしたちを追い立てる。そういう務めを神さまから与えられたもののようです。もちろんイエスさまもそういう目を持っておられます。けれど、ここでのイエスさまのまなざしは、ガリラヤの漁師たちの心の中に潜んでいる悪を暴き立てて、さあ、あなたがたは罪人だね、と審くためのものではありませんでした。イエスさまに「ついて来なさい」と言われて、4人とも、網を捨て、イエスさまの後に従います。ここで大切なことは、これまでの生活から彼らを解き放ったということ。新しい生活へと踏み込んで行く。イエスさまの目は、そういう解き放つ力を持った目でした。急所を見抜いて、新しいところへと移す目でした。その新しいところとは、神さまの憐れみと恵みのなかで生きるところです。その恵みの中へと引き出す目が、イエスさまのまなざしでした。

まずイエスさまはここで、一気に4人もお召しになったということ。しかもこの4人は、最初のグループで、この後大きくなっていきます。特にシモンは、後にペトロと呼ばれるようになります。この4人はそれぞれ、後の教会の指導者となって、教会の群れの先頭に立つようになりました。そして、おそらく彼らは殉教の死を遂げたと言われます。最後まで主に忠実に仕えて伝道した人たち、これらの人たちが教会を立てて戦ったときに、周りから何度も尋ねられたらと思う。[先生は、どうして伝道者になったのですか]。きっと何度も尋ねられ、何度でも喜んで答えたと思います。イエスさまがわたしを呼んでくださった。わたしをイエスさまの働きの仲間に入れて下さった。わたしたちはイエスさまと一緒に歩いた。イエスさまと一緒にガリラヤを、イエスさまと一緒にエルサレムへの道を歩いた。もちろん失敗もあった。沢山あった。悔いることも山ほどあった。けれど、イエスさまと一緒に働いた。そして、今も主イエスと共に働いている。

たとえば、教会で奉仕するということは、ここで生きて働いておられる主イエスの働きをわたしたちも一緒にさせていただく、ということです。だからこの弟子たちだけではありません。彼らの働きのなかで教会が造られ、広がっていったときに、そのことを語っている使徒言行録は、たとえば、わたしたちであるならば、半田教会の会員数 100 名というべきところを、「主の弟子となった者 100 名」と数えました。教会員という表現よりも、こちらの方がいいかもしれません。どの教会も、それぞれ、主イエスの弟子となった者何名と記録します。マルコがここで語るのは、その最初の弟子たちの話です。だからこれは、わたしたちの話です。ここにわたしたちを招いて召してくださいましたイエスさまの目と、そのお言葉がどんな働きをしたかということ、マルコ自身が、その目と言葉に捕えられた喜びの中で書きました。

イエスさまは弟子たちに、「わたしについて来なさい」と言われました。この言葉がとても大切な言葉だということは、

これから福音書を読み進んで行くとよく分かります。「ついて行く」、「従う」。イエスさまとそれに従う者たちの物語、それが福音書です。イエスさまは、「わたしについて来なさい」と言われ、二人はすぐに網を捨てて「従った」。特に大切なのは20節終わり。「イエスの後について行った」。元の言葉で読むと、この「後について行った」という言葉は、17節の「わたしについて来なさい」という言葉を繰り返すものですが、ただ「従う」という意味だけではなくて、ある人の後ろについて行く、ある人の背中を見ながら、いつもその後ろにくっついて歩いて行くという、そういう意味を特に強調した言葉です。

わたしたちもイエスさまの弟子です。いつもイエスさまの背中を見つめて生きているということです。もし他の人の背中が見えてきたら要注意です。牧師の背中も違います。いつもイエスさまの背中が見えているか。そのようにイエスさまは、わたしの後について来なさい、と背中を見せていてくださる。その背中で、わたしたちを引っ張るようにして、背負うように

して、わたしたちの先に立っていただきます。わたしたちの教会は、そういう弟子たちによって造られています。

さて、ここでイエスさまに「ついて来なさい」と言われて4人の者がすぐについて行きましたが、実はこれが後に問題になりました。教会の歴史が始まった頃、すべてが順調だったわけではありません。すぐに批判する人たちが出てきたようです。そうすると、それに答えなければならない。迫害の手も伸びてきます。それに耐えなければならない。その頃の教会批判の一つに、いったい教会はどのように始まったか、教会で働く者たちはどういう人たちか、イエスというものについて来いと言われてすぐについて行くような、慎重に考えた、十分な動機があったとも書いていない。どうしてあなたは弟子になったのか、どうしてあなたは死に至るまでそのイエスという者のために忠誠を尽くしたのか。すると、呼ばれただけです、としか答えられない。それは大の大人がすることか。そういう内容の批判だったようです。確かにここには、動機もなければ、迷いも

書かれていません。ただついて行っただけ。こんな軽はずみで、愚かなことではないか。そういう批判があったようです。なるほどと思います。人の目から見れば、なるほどです。けれど、人の目から見ればとても軽率に見えるこの判断が、実は、どれだけ確かなものだったのでしょうか。

うっかりすると、わたしたちも同じような考え違いをしているかもしれません。今、父なる神を信じ、イエスさまについて行くのに、これだけの十分な動機と理由があれば初めてキリスト者になる資格が生まれる。だからそれまでは待つことにしようというような考え方をしてしまうことがあります。けれど、もし、そうであれば、つまりわたしたちの方に十分な理由と考えが整ってから、イエスさまについて行くことにしようというのであれば、わたしたちの考えがぐらついたらどうなるのでしょうか。わたしたちが、これなら十分な動機になり得ると思ったものが、実はそうではなかったと疑い始めたら、どうなるのでしょうか。そして実にしばしばわたしたちはどういう錯

覚が理由になっても、教会を捨てることができ、イエスさまを捨てることができると思い込みます。もちろん、それは大きな間違いです。

弟子のペトロも、イエスさまと共にいつも歩いたわけではありません。「サタンよ、引き下がれ」とまでも言われました。けれど、その挫折があってもなお、主の後について行くことができました。それは、ペトロに十分な動機があったわけではありません。ペトロが十分な誠意を尽くしたから、最後まで歩くことができたのではありません。こちらに（わたしたちの方に）動機はなくても、神さまのほうに十分な動機があったのです。だから、ついて行ったのです。ついて行って、だんだんと、そのことが分かってくるのかもしれませんが。イエスさまはそのようにして、わたしたちをも、招いてお召しになられます。わたしたちに目を留めて、「ついて来なさい」と言われます。わたしたちは立てばいいのです。ここで一見、家族を捨てたかのように見えたシモンが、この後すぐに、イエスさまと一

緒に自分の家に入って行きます。姑の病気を、イエスさまによって癒していただきます。そして、その姑がもてなしたであろう食卓に、イエスさまと一緒につきます。

わたしたちが毎月礼拝の中で与る聖餐もそうです。聖餐は、イエスさまが弟子として選ばれた者たちと、まず最初に囲まれた食卓です。そしてその後、主の弟子となる者は皆、その食卓にあずかることをお求めになりました。

ある人がこう言いました。このマルコの記事を書いて、説明して、そしてその人は、この4人に続いて弟子となった人たちは、こういう人たちだと、福音書のなかに出てくる人たちの名前を次々と書いていきます。名前が分からない徴税人、名前が分からない病人、いろんな人たちのリストを挙げて、最後にこう書きます。最後に、あの十字架のもとに踏みとどまった女性たち、甦りの朝に真っ先に墓にかけつけたあの女性たちがいる、と。あの女性たちもまた、この主イエスの弟子たちでし

た。彼女たちもまた、甦りの主と共にこの食卓にあずかりました。そして喜んで働きました。いつも、主と共にあり、いつも主が先に立っていて下さり、いつもその主の背中を見ていれば安心だと思って、歩き続けました。わたしたちも、この礼拝の後、ここから出て行きます。弟子として、出て行きます。主イエスと共に出て行きます。主が先に立って歩いていてくださるから、家族のところに行きます。友だちのところに行きます。難しいなあと思っている自分の職場に戻ります。主が共にいてくださることを、先立っていてくださることを深く信じて歩み続ける。それができます。主イエスの背を見つめているからです。お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神さま、かたくなな心があれば、聖霊を注いで、柔らかな心に変えてください。いのちを失っている者がありましたら、聖霊を注いで、いのちを豊かに与えてください。あなたが与えてくださる、わたしたちひとりひとりの、教会に生きる歩みを、あなたがいつもみ言葉をもつ

て支え、聖霊をもってみずみずしく生かし続けてください。主
イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン

讃美歌 讃美歌 21-470-2 (大きな手が)

献 金 讃美歌 21-65-2

報 告 週報の 3 頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>